



なばり

2012年(平成24年) 3月11日発行

主な内容

- 1……大震災と障害者支援
- 2……地震対策(非常持ち出し袋、災害時の情報入手方法など)
- 4……もしも災害の一日前に戻れたら…、名張市防災講演会

3.11 防災特集

発行/名張市企画財政部広報対話室 〒518-0492 名張市鴻之台1-1 ☎0595-63-7402 ✉pr@city.nabari.mie.jp 🌐http://www.city.nabari.lg.jp



突然の災害による急激な環境変化に、対応しきれない人たちがいることを知っておいてください。

三重県自閉症協会
角谷 光子さん

自閉症の人たちは、突然の災害による避難所生活など、急激な環境変化に対して、うまく脳が処理しきれず、かんしゃくやパニックを起こすことがあります。また、長時間並ぶことや、順番を守ることが苦手な人もいます。こうした行動は、決して周りに迷惑をかけようとしているものではありません。また、間仕切りなどで、緊張や不安を軽減できる場合もあります。こうした周囲の理解や配慮を必要とする人たちが地域にいることを知っていただきたいです。そして、自閉症の人がいる家族は、積極的に地域の防災訓練などに参加し、地域での理解者を増やしていくことも大切だと思います。



聴覚に障害があることで、災害時に情報がすぐに伝わって来ないのではと不安を感じます。

名張市聴覚障害者協会
窪田 智子さん

災害時に必要な情報を入手できるのか、すぐに情報が伝わってこないのではという不安があります。外出先では、スピーカーの音などは聞こえませんが、モニターなどによる文字情報も必要です。また、避難所でも、食べ物や水などが配布される際、どう集まればいいのか、どう並べばよいのか分からないかもしれません。聴覚障害というのは一見しては分かりませんが、だれもが必要な情報を教えてくれるとは限らないのです。筆談やゆっくりとした口話などで、情報を伝えていただきたいのですが、もし、手話が分かる人がいれば、とっても安心できると思います。



要援護者を事前に把握。地域全体で助け合いながら、災害時に孤立する人を出さないように。

名張市民生委員児童委員協議会連合会 福山 悦子さん

名張地区では、障害者や高齢者など、災害時に避難が困難な要援護者宅を訪問し、どんな支援が必要なのか、避難の予定場所はどこかなどを聞き取っています。また、要援護者がどこにいるのかがすぐに分かるように地図に落とし込んだりもしています。さらに、要援護者の近所に住む人にも、いざというときの支援をお願いしています。今後も、民生委員児童委員や区長をはじめ、地域全体で助け合いながら、災害時に孤立した人を出さないような取組みを続けていきたいと考えています。

大震災と障害者支援

災害時に、より支援を必要とする人がいます



東日本大震災の発生から、今日で一年が経ちました。甚大な被害は広範囲に及び、避難生活も長期化。こうした中、さまざまな課題も見出されています。

今号では、1月29日に防災センターで開催された「障害者等のための防災セミナー」での講演や議論を通じて、障害者などに対する災害支援の課題や取組みをご紹介します。

☎ 高齢・障害支援室 ☎ 63-7591
危機管理室 ☎ 63-7271

被災地では、要援護者が避難所に避難できないという状況がありました。

社会福祉法人 AJU 自立の家
水谷 真さん

東日本大震災の被災地への支援
物資提供や、障害者介助などに
取り組んできた



東日本大震災の被災地では、多くの要援護者が避難所ではなく、余震に揺れる自宅や車の中で耐えているという状況がみられました。

簡易トイレが車いすで利用できない。避難所という大きな空間が不安を駆り立て、大きな声を出す・泣くなどの行動につながる。寝たきりの人が大衆の面前でオムツ替えをせざるを得ない。介助が必要で、周りに迷惑をかけてしまうことがつらい…。病気を抱える人、高齢者、障害者、妊婦など、避難所に居場所がないと感じた人は、避難所を去るか、避難所で相当な我慢を強いられていたのです。

避難所の開設、毛布や食事の提供、簡易トイレの設置、そして、数日後に自衛隊風呂。こうした紋切り型の支援だけでは、生きていけない人たちがいます。避難所のリーダーは、「みんな被災して同じだ」といいますが、避難してから状況は同じではありません。「大量、一斉、公平、画一」という従来からの支援の原則ではこぼれ落ちる人たちがいるのです。「公平」ではなく、より困っている人を優先に一。「みんな困っているのだから」と我慢を強いられ、「こんな支援が必要」という声を発信できない人があることを知っておいていただきたいのです。

大規模災害時、行政はすぐに動けません。福祉施設のスタッフも被災します。また、要援護者の居場所が把握されていなかったため、わたしたち支援する側も困難を抱えました。やはり、隣近所の日常からの結びつきが大切なのだと思います。障害者も含め、地域の中でともに生きる関係を築いておく必要があるのではないのでしょうか。